

かいじあむティーチャーズ・クラブ2006  
「県立博物館を活用しての実践的アイデア」について

2006(平成18)年12月22日

山梨県総合教育センター 主幹・研修主事 三井 誠

主題 「博物館展示内容及び敷地庭樹と文学との関わりについて  
文学的視点から、博学連携を図る」

主題設定の理由

県立博物館を文学と言う視点で眺め遣ると、既に県立文学館があるとは言え、博物館の展示と結び付いたり体験学習を通したりする中での独自の役割分担が望まれよう。

そこで、博学連携を視座に据え、文学と県立博物館の展示及び館敷地の庭樹との関係を明らかにすることを通して、児童生徒に文学的立場からも、博物館を活用した主体的・体験的な学習が可能となることを意図した。

博物館展示内容と文学との関わり調査

1 展示「山梨の舞台」(\*各種下線・網字は筆者)

『平家物語』…角川文庫 下巻 佐藤 謙三 校註 卷十 六 海道下りの事

…宇津の山辺の鶯の道、心細くもうち越えて、手越しを過ぎて行けば、北に遠ざかって、  
雪白き山あり。問へば甲斐の白嶺と云ふ。その時、三位の中將、落つる涙を抑へつゝ、  
をしからぬ 命なれども 今日までに つれなき甲斐の しらねをも見つ…

『山岳紀行文集 日本アルプス』…小島烏水 著 (近藤信行 編 岩波文庫 1992年刊)

「山を讚する文」(明治36年 甲州台ヶ原の旅館竹屋にて執筆)「雪の白峰」(明治41年執筆)「不尽の高根」(昭和2年7月の富士登山記)等

『川釣り』…井伏鱒二 著 (岩波文庫 1990年刊 元は、1952年刊の岩波新書)

「掛け持ち」…「甲府市の直ぐ近く湯村の篠笹屋というのはかなり大きな温泉宿で、この宿に長さん竹さん喜十さんの番頭がいる。…湯村温泉ではどの宿もみなそうであるが、春と秋には昇仙峡見物の団体客が押しかけて、…」

『日本百名山』…深田久弥 著 (深田久弥 山の文庫1 昭和57年 朝日新聞社)

「八ヶ岳」「甲武信岳」「金峰山」「瑞牆山」「大菩薩岳」「富士山」  
「甲斐駒ヶ岳」「鳳凰山」「北岳」「間の岳」

参考：『大菩薩峠』…中里介山 著 長編時代小説 1913年～1944年都新聞・毎日新聞・読売新聞などに連載。41巻にのぼる未完の一大巨編。  
(フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』に拠る)

## 2 展示「3 甲斐の誕生」

『古事記』…倭建命（やまとたけるのみこと）

「すなはちその国より越えて、甲斐（かひ）に出でて、酒折宮（さかをりのみや）に坐（ましま）しし時に、歌ひて曰（のりたま）ひしく、 にひばり筑波（つくは）を過ぎて 幾夜か寝つる とのりたまひき。ここにその御火焼（みひたき）の老人（おきな）御歌（みうた）を続（つ）ぎて歌ひて曰（い）ひしく、 かがなべて 夜には九夜（このよ） 日には十日をと言ひき。ここをもちてその老人を誉（ほ）めて、すなはち東の国造（くにのみやつこ）を給ひき。」古文 古典 乙 新修版 明治書院 昭和50文部省改訂検定済 原文は『校本 古事記』より」

## 3 展示「3 甲斐の黒駒」…

紹介： 古代甲斐国は、「甲斐の黒駒」という名馬の産地として知られ、平安時代には毎年都に献上するための馬を育てる牧場がつくられました。山梨の人と馬とのつながりは深く、豊かな自然が広大な牧場となり、多くの良馬が生まれました。（博物館がトブッパP19より）」

『日本書紀』…巻第14 雄略天皇13年(469)9月 「甲斐の黒駒伝説」

〔訓読文〕岩波文庫 日本書紀(三)1994年 坂本太郎他3名校注(P70-72)より

秋九月(ながつき)に、木工韋那部真根(こたくみぬなべのまね)、石を以(も)て質(あて)として、斧(てを)を揮(と)りて材(き)を斲(けつ)る。終日(ひねもす)に斲(けつ)れども、誤りて刃を傷(やぶ)らず。天皇(すめらみこと)、其所(そこ)に遊詣(いでま)して、怪(あやし)び問ひて曰(のたま)はく、「恒(つね)に石に誤り中(あ)てじや」とのたまふ。真根、答(こた)へて曰(まう)さく、「竟(つひ)に誤らじ」とまうす。乃(すなは)ち采女(うねめ)を喚(め)し集(つど)へて、衣裾(きぬも)を脱(ぬ)ぎて、著犢鼻(たぶさぎ \*「ふんどし」のこと)して、露(あらは)なる所に相撲(すまひ)とらしむ。是(こ)に、真根、暫(しばし)停(や)めて、仰(あふ)ぎ視(み)て斲(けつ)る。覺(おもほ)えずして手の誤(あやまち)に刃傷(きず)く。天皇、因(よ)りて噴讓(せ)めて曰(のたま)はく、「何処(いづく)にありし奴(やつこ)ぞ。朕(われ)を畏(おそ)りずして、貞(ただ)しからぬ心を用(も)て、妄(みだりがは)しく輒輕(ただち)に答へつる」とのたまふ。仍(よ)りて物部(ものべ)に付(さづ)けて、野に刑(ころ)さしむ。爰(こ)に同伴巧者(あひたかみ)有(あ)りて、真根を歎(なげ)き惜(あたら)しびて、作歌(うたよみ)して曰(い)はく、

あたらしき 韋那部の工匠(たくみ) 懸(か)けし墨繩(すみなは) 其(し)が無けば

誰(たれ)か懸(か)けむよ あたら墨繩

天皇、是(こ)の歌を聞かして、反(かへ)りて悔惜(あたら)しびたまふことを生(な)して、喟然(なげ)きて頽歎(なげ)きて曰(のたま)はく、「幾(ほとほど)に人を失ひつるかな」とのたまふ。乃ち赦使(ゆるすつかひ)を以(も)て、甲斐の黒駒に乗りて、馳(は)せて刑所(ころすところ)に詣(いた)りて、止(や)めて赦(ゆる)したまふ。用(よ)りて徽纏(ゆはひづな)を解(と)く。復(また)作歌(あうたよみ)して曰(のたま)はく、

ぬば玉の 甲斐の黒駒 鞍着せば 命死なまし 甲斐の黒駒

〔現代語訳〕講談社学術文庫 日本書紀(上)1988年 宇治谷孟 訳(P305~306)より

秋九月、工匠(こたくみ)の韋那部真根(いなべのまね)が、石を台にして斧で材(き)を削っていた。終日削っても、誤って刀をつぶすことがなかった。天皇がそこへおいでになり、怪しんで問われ、「いつも誤って石にあてることがないのか」といわれた。真根は「決して誤ることはありません」といった。そこで天皇は采女を召し集めて、着物を脱いで、ふんどしをつけさせ、皆の前で相撲をとらせた。真根は少し手を休め、それから仰ぎ見ながら削った。覚えず気を奪われ、斧を台石にあてて刃を傷つけた。すると天皇は責めて、「どこの奴だ。朕(わ)を恐れず、不貞の心の奴が、妄(みだ)りに軽々しいことをいって」といわれた。刑吏に渡し、野で処刑しようとした。工匠の同僚が真根を惜しみ歎いて、歌を詠んだ。

ああ、惜しむべき韋那部の工匠(たくみ)よ。彼の掛けた墨縄の技術は、立派なものだった。彼がいなかったら、誰が彼の妙技を継ごうか、継ぐ者はないだろう。

天皇はこの歌を聞かれて、後悔され歎いて、「うっかり人を失うところだった」と。赦免の使いを、甲斐の黒駒に乗せ、刑場に走らせ、刑をゆるされた。そして結え綱を解き歌を詠まれた。

甲斐の黒駒に、もし鞍を置いたりしていたら、手遅れになって、工匠は死んでいただろうなあ。甲斐の黒駒よ。

『日本書紀』…巻第28 天武天皇上元年(672)7月

〔訓読文〕岩波文庫 日本書紀(五)1995年 坂本太郎他3名校注(P102)より

…鯨(くぢら \*人名 不詳 大友皇子側の将の一)、白馬(おをうま)に乗りて逃ぐ。馬泥田(ふかた)に墮(お)ち、進み行くこと能(あた)はず。則(すなは)ち將軍(いくさのみ)吹負(ふけひ)、甲斐の勇(たけき)者(ひと)に謂(かた)りて曰(い)はく、「其(か)の白馬(おをうま)に乗れる者(もの)は、廬井鯨(いほゐのくぢら)なり。急(すみやか)に追ひて射よ」といふ。是(こ)に、甲斐の勇者、馳せて追ふ。鯨に及ぶ比(こほひ)に、鯨急(たちまち)に馬に鞭(むち)うつ。馬能(よ)く抜けて泥(ひぢり)を出(い)づ。即(すなは)ち馳せて脱(まぬか)るること得たり。將軍(いくさのみ)、亦(また)更に本処(もとところ)に還(かへ)りて軍(いくさ)す。此(こ)れより以後(のち)、近江の軍(いくさ)遂(つひ)に至(いた)らず。

〔現代語訳〕講談社学術文庫 日本書紀(下)1988年 宇治谷孟 訳(P258)より

…鯨は白馬に乗って逃げたが、馬は深田にはまって進むことができなかった。將軍吹負は甲斐国の勇者に、「あの白馬に乗っているのは、廬井鯨である。早く追いかけて射よ」と命じた。甲斐の勇者は馬を馳せて追った。鯨に迫る頃に、鯨ははげしく馬に鞭打ったので、馬は能(よ)く抜け出して馳せ逃げるのができた。將軍はまた飛鳥の本営に帰り、軍を構えた。これ以後近江軍はもう来なかった。

出来れば甲斐駒(馬)の実物大模型がほしい。せめて、部分模型であっても、鞍と鐙、鞭を用意し、どの程度の高さ(当時の日本の馬は意外に体高は低く、1m50cmにも満たないか)で戦っていたのか、安全性に配慮した上で実感させたい。

なお、馬の速力等についての説明も望まれる。

#### 4 展示「6 甲斐を駆ける武士たち」

源平の合戦で活躍し、全国に発展した甲斐源氏

『平家物語』(巻九「木曾の最期」)

...木曾は長坂を経て、丹波路へおもむくとも聞こえけり。

...三百余騎ぞ馳せ集まる。木曾大きに喜びて、『この勢あらば、などか最後のいくさせざるべき。ここにしぐらうて見ゆるは誰(た)が手やらむ。』『甲斐の一条次郎殿とこそ承り候へ。』『勢はいくらほどあるやらむ。』『六千余騎とこそ聞こえ候へ。』『さてはよい敵ござんなれ。同じう死なば、よからう敵に駆け会うて、大勢の中でこそ討死をもせめ。』とて、真つ先にこそ進みけれ。【本文脚注 甲斐源氏。武田太郎信義の子忠頼。】

木曾左馬頭(さまのかみ)、その日の装束には、赤地の錦(にしき)の直垂(ひたれ)に、唐綾威(からあやをどし)の鎧着て、鍬形(くはがた)打つたる甲(かぶと)の緒締め、巖物作(いかものづく)りの大太刀はき、石打ちの矢の、その日のいくさに射て少々残つたるを、頭高(かしらだか)に負ひなし、滋籐(しげとう)の弓持つて、聞こゆる木曾の鬼葦毛(おにあしげ)といふ馬の、きはめて太うたくましいに、金覆輪(きんぷくりん)の鞍(くら)置いてぞ乗ったりける。鎧(あぶみ)ふんばり立ち上がり、大音声(だいおんじやう)をあげて名のりけるは、『昔は聞きけむものを、木曾の冠者(くわんじや)、今は見るらむ、左馬頭兼伊予守(いよのかみ)、朝日の將軍源義仲ぞや。甲斐の一条次郎とこそ聞け。互ひによい敵ぞ。義仲討つて兵衛佐(ひやうゑのすけ)に見せよや。』とて、わめいて駆く。一条次郎、『ただいま名のるは大將軍ぞ。あますな者ども、もらすな若党(わかたう)、討てや。』とて、大勢の中に取りこめて、我討つ取らむとぞ進みける。...

「高等学校用 国語 改訂版 筑摩書房 昭和59年 文部省検定済 原文は『日本古典文学全集』より」

『風林火山』...井上靖の長編小説。伝説上の軍師山本勘助を描く。1955年新潮社刊。

(フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』に拠る)

『天と地と』...海音寺潮五郎の歴史小説。上杉謙信の生涯を、生まれる前から川中島の戦い直後まで描く。海音寺の代表作である。1968年朝日新聞社刊。

(フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』に拠る)

『笛吹川』...深沢七郎 著(1958作)

#### 5 展示「11 川を彩る高瀬舟」

『高瀬舟』...森鷗外 著(大正5年1月「中央公論」初出)

中学・高校の国語教科書に多く採用されている。主に京都の高瀬川を舞台にしているが、「安楽死」と「知足」をテーマにした鷗外の代表作である。

船底の平らな木造船の一部実物大模型の見学、紙模型の製作作業を通して、文学世界への導入の効果が得られよう。

6 展示「9 城下町の賑わい」「12 道がつなぐ出会い」「13 江戸文化の往来」  
『富嶽百景』…太宰治 著

…昭和十三年の初秋、思いをあらたにする覚悟で、私は、かばんひとつさげて旅に出た。

甲州。ここの山々の特徴は、山々の起伏の線の、へんにむなしい、なだらかさにある。小島烏水という人の『日本山水論』にも、「山の拗(す)ね者は多く、此(この)土に仙遊するがごとし」とあった。甲州の山々は、あるいは山の、げてもものなのかも知れない。私は、甲府市からバスにゆられて一時間。御坂峠へたどりつく。

御坂峠、海拔千三百メートル。この峠の頂上に、天下茶屋という、小さい茶屋があって、井伏鱒二氏が初夏のころから、ここの二階に、こもって仕事をしておられる。私は、それを知ってここへ来た。井伏氏のお仕事の邪魔にならないようなら、隣室でも借りて、私も、しばらくそこで仙遊しようと思っていた。

井伏氏は、仕事をしておられた。私は、井伏氏の許しを得て、当分その茶屋に落ち着くことになって、それから、毎日、いやでも富士と真正面から、向き合っていなければならなくなった。この峠は、甲府から東海道に出る鎌倉往還の衝に当たっていて、北面富士の代表観望台であるといわれ、ここから見た富士は、昔から富士三景の一つにかぞえられているのだそうであるが、私は、あまり好かなかった。…

その翌々日であったろうか、井伏氏は、御坂峠を引きあげることになって、私も甲府までおともした。甲府で私は、ある娘さんと見合いすることになっていた。井伏氏に連れられて甲府の町はずれの、その娘さんのお家へお伺いした。井伏氏は、無雑作な登山服姿である。私は、角帯に、夏羽織を着ていた。娘さんのお家のお庭には、薔薇(ばら)がたくさん植えられていた。母堂に迎えられて客間に通され、あいさつして、そのうちに娘さんも出て来て、私は、娘さんの顔を見なかった。井伏氏と母堂とは、大人どうしの、よもやまの話をして、ふと、井伏氏が、

「おや、富士。」とつぶやいて、私の背後の長押(ながし)を見あげた。私も、からだをねじ曲げて、うしろの長押を見上げた。富士山頂大噴火口の鳥瞰(ちょうかん)写真が、額縁にいれられて、かけられていた。真っ白い睡蓮(すいれん)の花に似ていた。私は、それを見届け、また、ゆっくりからだをねじ戻すとき、娘さんを、ちらと見た。決めた。多少の困難があっても、この人と結婚したいものだと思った。あの富士は、ありがたかった。

井伏氏は、その日に帰京なされ、私は、再び御坂に引き返した。それから、九月、十月、十一月の十五日まで、御坂の茶屋での二階、少しずつ、少しずつ、仕事をすすめ、あまり好かないこの「富士三景の一つ」と、へたばるほど対談した。

…その明るる日に、山を下りた。まず、甲府の安宿に一泊して、その明るる朝、安宿の廊下の汚い欄干によりかかり、富士を見ると、甲府の富士は、山々の後ろから、三分の一ほど顔を出している。酸漿(あずき)に似ていた。

(昭和十四年二月 三日)「高等学校 国語 改訂版 旺文社 本文は『太宰治全集・第二巻(1975年刊)』より」

補記 「作品に登場する植物について」

薔薇…「娘さんのお家のお庭には、薔薇(ばら)がたくさん植えられていた。」

睡蓮(すいれん)…「真っ白い睡蓮(すいれん)の花に似ていた。」

月見草（「待宵草」の俗称）...「三七七八メートルの富士の山と、立派に相對峙(あたいし)し、みじんもゆるがず、なんと云うのか、金剛力草とでも言いたいくらい、けなげにすくと立っていたあの月見草は、よかった。富士には、月見草がよく似合う。」

罌粟（雛罌粟で代用）...「まん中に大きい富士、その下に小さい、罌粟(けし)の花ふたつ。二人そろいの赤い外套を着ているのである。二人は、ひしと抱き合うように寄り添い、きつとまじめな顔になった。私は、おかしくてならない。カメラ持つ手がふるえて、どうにもならぬ。笑いをこらえて、レンズをのぞけば、罌粟の花、いよいよ澄まして、固くなっている。どうにも狙いがつけにくく、私は、二人の姿をレンズから追放して、ただ富士山だけを、レンズいっぱいにかッチして、富士山、さようなら、お世話になりました。パチリ。」

酸漿...「富士を見ると、甲府の富士は、山々の後ろから、三分の一ほど顔を出している。酸漿(ほおずき)に似ていた。」

例えば、夏から初秋に特別展として、「『富嶽百景』の作品に登場する花のコーナー」とでも銘打って博物館前庭に特設したらいかがか。

鎌倉往還...「16 いくつの道を制覇できるか？ 江戸時代の街道を旅するルームランナー」「江戸時代の山梨を通過していた主な5つの道、甲州道中、谷村道、鎌倉往還、駿州往還、青梅街道。かいじあむでは、シミュレーション装置で5つの道を旅することができるのです。(博物館がトブックP90より)」

『新樹の言葉』...太宰治 著 新潮文庫 昭和57年刊

甲府は盆地である。四辺、皆、山である。...よく人は、甲府を、「播鉢(すりばち)の底」と評しているが、当たっていない。甲府は、もっとハイカラである。シルクハットを倒さまにして、その帽子の底に、小さい小さい旗を立てた、それが甲府だと思えば、間違いはない。きれいに文化の、しみとおっているまちである。...

...もう、この辺は、桜町である。甲府で一ばん賑やかな通りで、土地の人は、甲府銀座と呼んでいる。東京の道玄坂を小綺麗に整頓したような街である。...

デパートに沿って右に曲折すると、柳町である。ここはひっそりしている。けれども両側の家家は、すべて黒ずんだ老舗である。甲府では、最も品格の高い街であろう。

(昭和14年5月作)

『畜犬談』...太宰治 著 雑誌「文学者」(1939年8月号発表)「高等学校 新選 現代国語一 改訂版 尚学図書 本文は『太宰治全集・第三巻(1970年刊)』より」

私は、犬については自信がある。いつの日か、必ず食いつかれるであろうという自信である。...

今年の正月、山梨県、甲府の町外れに八畳、三畳、一畳という草庵を借り、こっそり隠れるように住み込み、下手な小説あくせく書き進めていたのであるが、この甲府の町、ど

こへ行っても犬がいる。おびたしいのである。…甲府の家ごと、家ごと、少なくとも二匹くらいずつ養っているのではないかと思われるほどに、おびたしい数である。山梨県は、もともと甲斐犬の産地として知られているようであるが、街頭で見かける犬の姿は、けっしてそんな純血種のものではない。…

早春のこと。夕食の少し前に、私はすぐ近くの四十九連隊の練兵場へ散歩に出て、二、三の犬が私のあとについて来て、いまにもかかとをがぶりとやられはせぬかと生きた気もせず、けれども毎度のことであり、観念して無心平生を装い、ぱっと脱兎のごとく走り逃げたい衝動を懸命に抑え、抑え、ぶらりぶらり歩いた。…

#### 7 展示「15 変貌する景観 養蚕王国から果樹王国へ」

『女工哀史』…細井和喜蔵 著 1925(大正14)年刊 \*現代岩波文庫版で入手可能 ルポルタ - ジュ文学。

「近代山梨をささえた女性達」…錦絵「勸業製糸場」

紹介： 1874年(明治7)年には、県営勸業製糸場という製糸工場が建設された。作業員約四百名と全国でも有数の規模を誇った。製糸工場の相次ぐ設立により、山梨県の製糸生産量は飛躍的に増大した。

その成功は、工場で働く「女工」と呼ばれる女性達によって支えられていたのである。

1886(明治19)年日本初の女性ストライキが甲府の雨宮製糸場で発生し、次々と周辺の工場でもストライキが起きた。長時間労働や賃金問題をはじめ、工場内の労働条件は決して恵まれたものではなかったからである。

(山梨県立博物館 常設展示案内 P49 「近代山梨をささえた女性達」に拠る)

『ああ野麦峠』…山本茂実 著 1968(昭和43)年刊 朝日新聞社 ルポルタ - ジュ文学。

#### 8 展示「18 山梨の顔 110人 出会いの現場：人物編」

新井白石(東京都出身 1657~1725)

『折たく柴の記』…新井白石 著 松村明 校注 岩波文庫 1999年刊

岩波書店案内文より …2度にわたる貧しい浪人生活の後、藩主綱豊の侍講として甲府藩に出仕した白石は、次第に綱豊の信任を得、「生類憐れみの令」の將軍綱吉の後を継いで綱豊が6代將軍家宣となるや、ともに幕政の改革に乗り出してゆく。6代家宣、7代家継の2代にわたって幕府の中樞で活躍した江戸中期の儒学者・政治家新井白石の自叙伝。

\*補記：木下順庵の推挙で1693年(元禄6)甲府藩主徳川綱豊(後の六代將軍家宣)に仕えることになるが、『折たく柴の記』(上)に甲府時代の様子が垣間見される。

荻生徂徠(東京都出身 1666~1728)

『峡中紀行』『風流使者記』…荻生徂徠 著 河村義昌 訳注 雄山閣 1971年刊

\*1696年(元禄9)31歳で五代將軍綱吉の側用人の柳沢吉保に仕えたが、その命を受けて甲斐国を訪問、その様子を紀行文(漢文体)としてまとめたものが本著である。

山県大弼(甲斐市・旧竜王町出身 1725-1767)

『柳子新論』…山県大弼 著 川浦玄智 訳註 岩波文庫 1943年刊

岩波書店案内文より …反幕府の言動により明和事件に連座して刑死した江戸時代の軍学者山県大弼(1725-1767)の主著。兵書孫子にならって13篇よりなり、正名篇からはじまる。幕府を慮って、自宅水害跡から発見された古書であると後文に記す。「尊王斥覇」を行動によって示すことを強調し、吉田松陰はじめ幕末の志士たちに大きな影響を与えた。

辻嵐外…(福井県出身 1771-1845)

館内紹介文より …江戸時代の俳人。元は越前国(福井県)の人で、五味可都里(かつり)(\*旧若草町藤田出身で「山梨の顔110人」にも選出 1743-1817)を尋ねて甲斐国までやってきた。数多くの門弟を育て、そのうち代表的な10人は「嵐外十哲」と呼ばれた。

補注(思文閣美術人名辞典に拠る):超俗的洒落の人で、甲斐の山八先生と呼ばれ敬愛された。甲府に住した。著書に『嵐外発句集』がある。

石橋湛山(東京都出身 1884-1973)

『石橋湛山評論集』…松尾尊兌 編 岩波文庫 1984年刊

『湛山回想』…石橋湛山 著 岩波文庫 1985年刊

『戦う石橋湛山』…半藤一利 著 東洋経済新報社 1995年刊 中公文庫版(1999年刊)もあり。

小川正子(笛吹市・旧春日居町出身 1902-1943)

『小島の春』…小川正子 著 1938年刊 長崎書店(角川文庫 昭和31年)

「松尾芭蕉」も選ばれているが、特に本県との関わりが際立っている訳ではないので割愛したい。本県との関わりで全国的な知名度を持つ意味では、例えば、文学関係では俳人飯田蛇笏(1885-1962)などは選出されてしかるべきと思われる〔江戸時代の俳人・治水家山口素堂(1642-1716)、歌人山崎方代、作家中村星湖、作家太宰治、野尻抱影(\*1885-1977 随筆家、天文研究家。星の民俗学者として知られ、旧制甲府中学英語教師も務めた)も出来れば入れたい〕。又、実業家、根津嘉一郎、小林一三なども入れるべきではないかと愚案する。今後、御考慮賜れば幸いである。

## 博物館敷地庭樹と文学との関わり調査

(今後の課題)

平成18年度は、第1段階として、不十分ながらも「博物館展示内容と文学との関わり調査」を実施した。次年度、平成19年度は、第2段階として「博物館敷地庭樹と文学との関わり調査」を行い、博物館側と協力しながら「館内敷地植物マップ」(リーフレット、あるいは栞)なども作成出来ればと思っている。更に、第3段階として、応用・発展的に、とを踏まえ、教材活用の観点から各種学習シートの作成に当たりたい。

以上 2006.12.22

